

タブレットの食卓

永井 日菜

常翔学園高等学校

ご飯を食べるのが好きな人間だとは思っている。社会の教科書を開けば世界の主食のページばかり眺め、国語便覧を開けば平安貴族の食事ばかり眺めている。キャッサバの味を思い浮かべ、蒸しアワビが食べられる貴族に憧れを多少抱いたりする。小学校の時にに入った科学クラブはべっこうあめが食べられるという一点において三年間入り続けたものだ。だから高校生になっても授業でご飯は頭の中によぎり続けている。いたって勉学の気持ちから入った世界史のサイトから世界の料理のサイトへ飛んでしまったのもつまり必然なのである。

高校ではタブレットを使っている。こいつはとても万能で辞書やらノートにもなるし、授業でわからない大概のことはネットの上の有能な方々が既に解決している。そう、世界史Bも然り。授業中何気なく入った世界史の解説サイト、ちょうどヨーロッパの国の話だった。そしてセルビアが出てきた。スラブ系の単元だった。なぜかセルビアのご飯を紹介するサイトのリンクが貼られていた。セルビア料理、聞いたことのないカテゴリーである。私が日本で見たことのある珍しい異国の料理はペルー料理屋が限界で、明らかにそれを超える珍しさ。それは四時間目の私の好奇心を刺激する代物だったに違いない。もちろん授業内容から些か逸脱してしまうことはわかっていた。だがあえて押さないという選択肢はなかった。結構お腹が空いていた。

軽快なタップとともに広がる世界は私の理想だった。セルビア料理のおいしそうな写真に、現地の屋台の様子。優れた文章と共に私の胃袋は刺激され、未知のにおいが鼻孔をくすぐる。妄想の中で私はセルビア料理を食べていた。私は店で椅子に座り注文をする。待っていると目の前に「チェバピ」が運ばれてきて、口の中にスパイスの味が広がる、聞き取れない会話の中でも、おいしいとだけはわかるそれを赤ワインで流し込む。もちろん全部妄想である。

また、すばらしいことに関連の記事にも様々な料理が広がっていた。思い出せるものだとキューバから、ベトナム、ケニア。世界史のテストでも書くジャイナ教の家庭の食事の記事だってあった。スワイプすればどんな世界のレストランにも、ダイニングにも行けた。完全にヨーロッパからも離れてしまったが、正しい授業態度と引き換えに私は世界の料理を手に入れた。

そんなことを続けて、妄想から進んだ私は自分で世界の料理を真似して作ってみたりもした。「アレパ」は香ばしいトウモロコシのにおいが食欲を、「クラフティ」は優しい甘さが癖になる素朴なお菓子だった。

恥ずかしながら、世界を旅する度胸も興味もなかった私にとってこのタブレットの中のサイトが初めて日本以外の世界に近づいた時だった。確かに触れていたのだ、世界に。

私はまたお腹を空かせてサイトを眺めている。知らない食材の味を想像し、調理の光景を想像し、食事の会話を想像する。私は世界を平和にできないだろうし、これからも日本で生きていく気はするが、今日もタブレット越しに様々な国の料理を美味しそうだと思っている。